
武装神姫～神姫が奏でる音～

焔の錬金術師ラビ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

武装神姫〜神姫が奏でる音〜

【Nコード】

N6472Z

【作者名】

焰の錬金術師ラビ

【あらすじ】

心と感情を持つ神姫、それに武装をさせて戦わせる『武装神姫』
蒼神 恭や咲神 拓樹もそんなプレイヤーの一人だった。
だが、ある事件が発生、それは神姫による暴走。
事件の真相は黒いコア、そして彼らの神姫は、そして彼ら自身も、
大きな戦いに身をおくことになった。

序章

西暦20306年

第3次世界大戦とか宇宙人の襲来とかは全くなく
世界は平和に稼働していた。

ただ変わったといえば、いまや当たり前となっている
光景がある。

全長15センチのフィギアロボット

<心と感情>を持つそれは

神姫と呼ばれていた。

マスターに従う彼女達はマスターの日常をサポートするなど
いまやなくてはならない存在となっていた

彼女達は多彩な器具、道具を装備でき、

作業効率の悪い場所を行うなどと企業面でも大活躍。

そんな彼女達に武器を持たせ『武装』させて

戦わせる、という競技が世界的に大流行。

そしていつしか彼女達は『武装神姫』と呼ばれるようになった。

戦う理由は人それぞれ、名誉か、ただのゲームか

それとも彼女達とともにいる時間を楽しみたいのか。

そして、戦いは始ろうとしていた。

今までにない、壮絶な戦いが・・・。

さてと・・・前置きはこれくらいでいいかな？
それじゃあ始めよう！

神姫紹介

アーンヴァルMk 2型

ベストセラー機体、アーンヴァルの後継機

素直な基本性格設定で初心者にも安心して扱える。

ストラーフMk 2型

ベストセラー機体ストラーフの後継機

基本性格設定は非常にクールだが信頼を築いていけば心強い機体。

ゼルノグライド型

リアル嗜好の武装が似合うモデル

その完成は基本性格設定にも抜かりなく反映されている。
ミリタリーファンにはお勧めしたい。

フブキ型

武装神姫書記のモデルだが命令に対して従順な基本性格設定は今も尚根強いファンがいる。

ロングセラーな機体。

エウ克蘭テ型

メカニカルに徹した機体デザイン。

このシリーズを機に第二世代に突入したと表現する人も多い。
基本性格設定は素直だが考えすぎな一面も。

イーアライネ型

エウ克蘭ンテ型と同じブランド機体。
母性すら感じさせる、しっとり落ち着いた基本性格設定は忙しい現
代人の
オアシスとなりえよう。

アーク型

スポーティな真紅の機体色が特徴。
責めのバトルスタイルが似合う。
基本性格設定は正義感が高く熱血。
オーナーもぐいぐいと引っ張る。

イーダ型

優雅なデザインが特徴のモデル。
反面基本性格設定は非常にビーカーに
設定されているため注意が必要。
コアな方向の上級者向け。

ハウリン型

犬好きに長年支持されている機体。
基本性格設定はオーナーに対して非常に従順で
バトルに対しても積極的。
よきパートナーになるだろう。

マオチャオ型

基本性格設定はマイペース。
好奇心旺盛だが飽きっぽい一面も。
だがそれが猫好きに愛され続ける由縁ともいえる。

アルトレーネ型

一般公募のグランプリ作品をもとに2ブランドが共同開発したモデル。

基本性格設定は素直で扱いやすいが少々柔軟さに欠ける一面も。

アルトアイネス型

アルトレーネ型の姉妹機。

性能的には申し分ないが基本性格設定では

やや扱い難しいところもあり

オーナーを選ぶ神姫とも言える。

ツガル型

サンタの衣装を模したカラーリングが印象的な機体。

現代っ子な基本性格にジエネレーションギャップを感じる

年配のオーナーもいるとか？

ジルバリーズ型

同じバイクモチーフでも姉妹機のエストリル型との差別化は見事。

一見ダーティな基本性格にヒールな魅力を感じられるだろう。

エストリル型

2ブランドが共同開発したモデル

ライダースーツを模したデザインが特徴的。

スピードを追い求める基本性格は貴方を刺激的な世界へといざなう？

神姫紹介（後書き）

はぁはぁ・・・ま、マジ疲れるぜ・・・
望すぐ冬休みだーバンザーイ意！！！！

キャラクター紹介

蒼神 あおがみ きよし 恭16歳

来年から高校2年生！

冬場を乗り切るために頑張るぜい！

と、心意気を決め込むただのバカ、神姫を

こよなく愛しておりバトルも真剣、だけど弱い。

常時ヘラヘラしており自分の神姫、ツガル型のネーナに

怒られる毎日、そんな彼はある日、ボロボロになったフェレット型に半壊した

アルトレーネ型と出会う、そしてそこから

彼の日常は壊れていく。

一人称は俺

使用神姫：ツガル型 ネーナ

アルトレーネ型 セシリア

フェレット型 タイガ

咲神 さきがみ ひろき 拓樹

蒼神の同級生、蒼神のテンションにいつも付き合う

彼も蒼神同様、神姫を愛しており

実力もある、愛用の神姫アーク型のシャーリーと

ともに彼もまた、戦いへと身を投じることになる。

ネーナ ツガル型

蒼神の愛用神姫、蒼神を引っ張りまわす性格や

ツンとした態度で彼を引つ張る。

最近の悩みは自分が人間だったらいいのになあ、と本気で思っていること。

理由は……。

セシリアが来てから蒼神が自分にあまりかまってくれなくなってしまうたことらしいが……？

セシリア アルトレネ型

ある出来事によりマスターが蒼神になる。

捨てられた自分を拾ってくれた、そういう理由で彼に従うが次第に神姫とは違う感情も芽生えてくる。

タイガ パーティオ型

トラをモチーフにしてるっぽい

黄色い神姫、マオチャオ型やハウリン型と同じタイプ

基本性格は子供のような無邪気、タイガはボロボロになったところを蒼神に助けられてその後彼を色々な呼び方ですたっている。

彼に甘える姿は完全に幼い女の子のようですねーナやセシリアもちょっとした危機感を覚える？

シャリー アーク型

咲神の愛用神姫、咲神一筋なその思いは

彼じしんの心境も変えていく

彼女もまた人間になりたいなあ……と思っている。

ひとすが
一菅 良太 りょうた

自分は神姫バトルで一番強いと自称している、

蒼神と咲神とは何回も衝突しているもその性格は直る気配がない。

神姫を道具として扱つことにより

蒼神らの怒りを買って喧嘩することもある。

ころころ神姫を変えるので愛用機体はない。

ブラッドワールド<血の世界>

アルトレーネ型を狙っていた集団

謎の黒いコアを神姫に埋め込み何かを企てている。

神姫をつかった犯罪の常習組織。

第1話 朝っぱらの大乱闘

「ん……ねみい……」

時刻は朝5時半、俺の目覚まし時計がうるさくなる時間。俺はこのまどろみをさまようのが朝一番の至福のときだ。

っていつかこの感覚が嫌いな人間いないんじゃない？

そんなことを思っている俺、そんな俺に

「まったく、いい加減におきろー……!!」
と、耳元でポリリュームマックスにした声が聞こえた。

「んが!?!」

俺は驚きベッドから転落、頭を強打、30のダメージ

などと考えながら俺は起床した。

頭を抑える俺を仁王立ちの『彼女』が叱る。

「まったく、いつもいつも私が起こしてたら目覚ましの意味ないじゃない!」

「ちゃんと起きなさい」

「つつつ……だからといってワザワザ音声最大でしかも耳元はねえだろ?ネーナ……」

俺は自分の神姫、ツガル型の『ネーナ』に向けて愚痴をこぼす。

ネーナはフンツと鼻を鳴らし

「起きないのが悪いのよ、私は起こしただけよ」
と、悪びれもしない。

「それよりも早く制服着なさいよ、遅刻するわよ？」

「お前は俺の母親か」

「しょうがないじゃない、お母さんがいないんだっいたら私がマスタ
ーをサポートしなきゃ」

と言って、ネーナはトテトテとリビングに向かう。

そう、今の俺に両親はいない、暗い理由があるわけじゃない
ただ単に俺がこの町に残りたいから残った。

他の兄弟達も海外だ、親の転勤で海外なんて冗談じゃない。

英語が苦手な俺にとっては地獄同然だ、というくだらない理由も含め
この町に残った、結果、俺の相棒のネーナがこうして
母親の役を買ってくれている、おかげでまあ朝起きることは出来る。

「ほら、早くご飯食べちゃおうよ、もう時間やばいわよ？」

「え！？ヤバ！！」

俺はネーナの声により回想シーンから目を覚まし

急いで朝食をとる、そして制服に着替えて鍵を閉めて。

「っいつてきまーす」

俺とネーナは誰もいない家に挨拶をして自転車をこぐ。

その間ネーナは胸ポケットに入っている。

この町ではもう日常化している神姫、俺もその波に入っている

ただの高校1年生、冬場のこの時期はおきるのが大変だがそこはネ

ーナが

起こしてくれるので何とかなっている。

勉強も赤点はギリギリ無いので進級に差し支えは無い、友人のロキとも

中は快調だ、ただ一つ、俺が苦手とすることを除けば万事問題なしなんだが・・・

「おはよー」

俺は扉をがらりと開けて教室に入る

そこには悪友こと咲神 拓樹とその相方、アーク型のシャーリーが待ち構えていた。

「よお、早速バトルしようぜ？」

「朝からかよ、飽きないねえお前も」

俺はため息をつきながら鞆を机に置く。

この冥府学園はちょっと特殊な学校で神姫の大会が存在する、もちろん学内で。

そこでこの町特有の学生神姫マスターは勉強などのストレスをそこで解消する、

ある意味いい学園なんだが・・・

「俺は弱いんだよ、バトルは・・・」

「やだなあ、だからこそやるんじゃないか？」

「鬼か!？」

俺はロキに突っ込みを入れて後ずさる、そう、俺は神姫バトルが弱い、

いやたぶん強いんだと思うがロキには中々勝てない、理由は……。

「お前の遠距離攻撃は懐に入られたらおしまいだもんな？」
ロキは意地悪くにやりと笑みを浮かべる。

俺の得意な分野は遠距離射撃系、対してロキは近距離格闘系
相性が最悪なのだ、いつもかなりおしているのだが最後に
懐に入られる、んでフルボッコに合う、一応ネーナにも接近戦の
セイバーを装備させているのだが……。

「マスターはあまり使わないから私がおぼえられるわけ無いじゃない
い」

「ですよねえ……」
と、この会話でもわかるように普段接近戦をしないため
格闘に持ち込まれたときの対策が全く無い。
それを知っていてこいつは俺に勝負を挑むのだからたちが悪い。

「さーてと、それじゃあやりますか！」
すでに武装させたシャーリーを机の上に待機させる

「つち、ならネーナ、いつちよリベンジだ！」
俺もネーナに武装させて机にセットさせる

「いくぜ？」

「かかって来い射撃バカ」

「レディー……」

GO!と、言おうとした二人に一つの光が飛び去った
「っ!?!」

「なんだ!?!」

俺達は光が飛んできた方向に目をやる、そこには意地悪く笑みを浮かべる

一瞥 良太と、その神姫がスナイパーライフルを装備していた。

「なんのつもりだ?」

ロキはバトルを邪魔されて早くもご立腹だ。

「あ?雑魚がたわむれてるから俺のXVで蹴散らそうって思ってたよ
お」

そういいながらまた射撃するゼルノグライド型のXV。

「あたるか!シャーリー!」

「了解です!」

ロキの合図で弾丸を避けるシャーリー、そしてそのまま接近する
さすが、怒っていても神姫の操作だけは間違えない。

「お前バカじゃね?XV!」
そういつて一瞥はXVに指令を送った、するとXVは
多弾頭ミサイルを撃ってきた!

(バカか!?!ここは一般教室だぞ!?!それを実弾兵器って...!何を
考えてんだよ!)

俺は一瞬真っ白になりすぐに我に返る。その標的になっているのは

俺の神姫、ネーナ。

「ッつ！ネーナ！」

「了解よ、マスター！」

俺の掛け声でネーナは装備していたハンドガンでミサイルを迎撃
次々と墮ちていくミサイル、ロキはその隙にシャーリーをXVに接
近させた

「やれ、シャーリー」

「了解、いきますよおー！」

そういつてバスターブレードを振りかざす、それを振り下ろした瞬
間に

XVは体を少しズラし回避した。

「っ！？」

空振りした剣はその重みのせいでシャーリーのバランスを大きく崩
した。

「だから、お前の攻撃ミエミエ、ちよつとは学習しろ」

そういつてXVの連続射撃をまともに喰らってしまったシャーリー

「っ！シャーリー！」

「っく・・・装甲がもちません！マスター！」

シャーリーの装甲が次々に破壊されていく、だがXVはいまだ撃つ
のを辞めない！

先ほどからこいつは・・・実弾兵器でネーナを狙い、今度は

超至近距離からの射撃、相手の神姫を壊そうとしているのが明白だ。

（このゲスが！）

心の中で俺は毒づく、だがすぐに状況の分析に戻る。

(このままじゃロキの神姫が！・・・でもここからの射撃だとミスったらシャーリーまで！)

俺は悩んでいた、相棒を失わせるわけにはいかない、だけど今の状況が

かなり悪い、このままだとあいつの思いつば・・・

「マスター」

ネーナが俺の服を引っ張る

「私のライフルであいつを撃ち抜くわ、シャーリーを何とかして」

「・・・わかった、ロキ！シャーリーを引かせろ！手段はなんでもいい！」

俺はやけくそ気味にロキに命令した、ロキはなにやら

シャーリーに指示を下らしく、彼女は自分の武器を犠牲にして後ろに後退した。

腕とスカートの装甲以外砕かれたシャーリーは苦しそうにロキの元へ戻った。

ロキは俺に眼を向けただ一言。

「やったれ！」

「任せろ、ネーナ！」

俺はネーナに射撃の合図をする、ネーナはすでに構えており

「任せてマスター、全く・・・マスターの朝の爽やかな時間を奪うなんて・・・

一度頭を冷やしなさい！こんのバカ神姫！！」

そういつて引き金を引いた、撃ち出された弾はXVのコアシステム

に直撃してXVの機動が停止した。

ちなみにこういうゲリラバトルの場合はコアシステムっていう胸のコアの部分にある程度の衝撃があたるとその神姫は一定時間機能停止する、それで勝敗を決める。

「ああ！？嘘だろ！？」

一菅はXVを拾って嘆く・・・ざまあ。

廊下で見ていた野次馬生徒達が

『やっぱりあのコンビが勝つか』

『っていつか何で一菅は毎回あいつ等に喧嘩売るのは？』
とぼそぼそ言っている。

ちなみに自慢じゃないが俺とロキは互いが互いの苦手を得意とするので

タッグを組んだら結構最強なのだ、おかげで

町内の神姫大会でハンドルネーム『黒猫』と『ロキ』は常に上位ランカーだ。

黒猫が俺な。

と、こんな風に俺達の学園生活は始る。

いや・・・一菅があんな喧嘩仕掛けるのは月に1〜2回くらいだ。今回は・・・その運が悪い日に当たった。

そして、廊下で見ていた野次馬生徒も終了と同時に

教室に入ってきた、さーてと、授業開始だ・・・ダリイな・・・。

第1話 朝っぱらの大乱闘（後書き）

はい！どーもラビです、今回はゲームが原作ということ
出演神姫以外は完全にオリジナルになっちゃいました。

いやーあるといいですよねえ学園で神姫バトル！

ー菅みたいなのバカもいたりしてさ！

第2話 フェレット型の神姫

「授業終了！帰って大会だあ！」

俺は授業が終了し、HRが終わったとたん飛び出す

「ちよつとマスター！？そんなに走るところぶよ・・・」

ネーナの注意を聞いた直後、空き缶に滑って頭を打つ

「いわんこつちゃ無い・・・」

ネーナは呆れたといわんばかりのため息を吐いた

（まったくマスターは・・・でも、そんなマスターがいいな・・・）
ネーナはひそかにそんな思いを持っていた。

初めてであったときは頼りなさそうだなあと思っていたけど
大会で勝ち進んでいき、いつの間にか『黒猫』は最強に近い
神姫使いになっていた。

そして、彼の世話を焼いているときふと思ったのだ・・・。

（これって私が人間だったら恋人みたいじゃない・・・ふふっ）
そんなことを考えながらネーナは今日も彼の胸ポケットに
入って彼を見上げている。

（咲神のシャーリー以外は勝てるもんね、マスターは）
でも・・・もし私が人間だったら・・・
そんなことをネーナは考えていた。

「うつしやーついたぜ!!」

俺は電車から飛び降りて会場に向けて走る
一ヶ月に1度のこの大会は俺にとつての何よりの楽しみ。
もうすぐ冬休みが始まるのでそれも楽しみ。
とにかく楽しく行くのが俺の信条。

そう信じて疑わない俺だった。

そして、大会のエントリーを終わらせて今回の大会の
説明に耳を傾ける。

今回の賞金は50000円の電子マネー。

この時代現金より電子マネーにする人は多く。

ケータイに電子マネーを貯蔵する、それゆえに最近
はケータイ狩りといった電子マネー目当ての

事件が多発している、それも神姫によって行われているのだから
たちが悪い、自分の手でやれよ……。

いやそれもだめだろうが……。

そんなことを思いながら俺は大会に臨んだ。

「いやー勝った勝ったあ、ロキがいないと余裕で勝ち進めるなあ」

「よかったね マスター」

俺は大会で圧勝し、黒猫の名前をさらに売りつけた。

「また有名になっちゃったなあ黒猫が」

「いいじゃない、黒猫の正体はマスターなんだからさ」

そんなことを話しながら道を歩いていると、カシャン、と何か足にぶつかる音がした。

「なんだ？」

俺は足にぶつかった物体を拾い上げた

それは神姫だった、マオチャオ型やハウリン型と同じ機種に見えるトラをモチーフにしたであろうその神姫はフェレット型と呼ばれている神姫だ。

「デモなんでこんなところに・・・？」

そしてふと気がつく

（この神姫、ボロボロじゃないか・・・）

パーティーオ型は右腕が千切れており左腕は潰れている

両足とも膝の下から砕けており

コアシステムはギリギリ無事だった。

（今はバッテリーが切れちゃってるって所か・・・）

ここまでくると直せるかどうかだがとりあえず持つて帰ることにした。

「いけるかな？ネーナ、それとつて」

「はい、マスター」

俺は家に戻り自室にこもっていた、っていうかどれも今じゃ自室だけどな

一人暮らしだし・・・。

恐らく神姫によって付けられた傷らしく

足、両腕は恐らく大型の武器で潰したと考えられる。
何とか修復に成功したフェレット型は今バッテリーの充電中だ。

「だけどなんであんな傷が？」

俺は頭をひねって考える、一番妥当なのはケータイ狩りか……？
でもその場合マスターは神姫を持って逃げるはず……
それとも……これは神姫の武器ではなくじこでなったものか……？

両腕は車に轢かれればあんな傷が出来るし……
両足のあの傷は……恐らく高いところからの転落……
打ち所か、高すぎる場所によっては考えられる……。

「考えすぎかな？」

そう思いながら俺はフェレット型の様子を見に行った。

「あれ？おきたんだ」

フェレット型は起動しており、ただこちらをじつと見ている
「おいおい、警戒しないでよ、君を治したのは俺だからさ」
そういつて笑いかけながらイスに座る
ネーナはフェレット型の前に立つ

「私はネーナっていうの、ヨロシクね」

そういつて手を差し出したネーナ

フェレット型はびくびくしながらその手を握る。

「何があつたの？あんな傷はそうそうできるもんじゃないよ」
俺は出来る限り相手を怖がらせないように
優しく話しかける。

すると、フェレット型は目に涙を浮かべ

「私は欠陥品だから、マスターに捨てられた・・・」

「え？」

「私はバトルで勝てないから、お前はクズだって・・・」

「え・・・えーっと・・・」

状況が飲み込めなくなった俺。

「それで・・・窓から投げ捨てられて・・・」
「そこまで言っていると泣き出してしまった」

そこで状況を理解した、こいつはバトルに勝てないって理由だけで捨てられたんだ。

ただそれだけのことで・・・。

俺はそのマスターに憤りを感じながら

「なら・・・俺の神姫になる？」

「え？」

フェレット型は目を見開いて俺を見る
ネーナも続いて

「そうよ、このマスターはへなちよこだけど神姫を愛してるってのは保障するわ」

「だれがへなちよこだ」

俺は口をへの字に曲げてフェレット型を見る

「とにかくだ、こんな状況なんだしさ、俺は全然かまわないぜ？」

笑いかけてやるとフェレット型は

ぱあっと明るくなったタイガ、そして

「改めてこれからもヨロシクね、お兄ちゃんと笑いかけた」

「うんヨロシクタイガ・・・つておにいちゃん!？」

「うん、タイガはおにいちゃんが大好きです!」

「え!?!ちよ・・・急に!?!」

「ふふ、マスター何にニヤけているのかな?」

「ね、ネーナ!?!どうしてハンドガンなんか・・・」

「悪いマスターにはお仕置が必要ね!?!」

「ちよ!?!まて!?!うわあああああ!?!」

この日、俺は新しい神姫にお兄ちゃんと呼ばれ
ネーナに撃たれるというちよつと嬉しいのか悲しいのか
わからない状況になってしまった。

第2話 フェレット型の神姫（後書き）

はい！更新完了！

しかしアレだ！今日パーティオのフィギア回に言ったのだが

いいねwww

ゲームでマオチャオでも使っちゃおうかな・・・？

それ以前にパーティオはPSPに出るかなあ？

第3話 タイガの前マスター

「ふう〜、昨日はひどい目にあつたなあ・・・」
俺は頬を撫でながら教室で呟く。

あの後ネーナからの攻撃で右の頬がひりひりする・・・
それだけならいいのだが・・・

「おにいちゃん、大丈夫？」

「頼むからそんな名前で俺を呼ぶな」

俺はバツクから顔を出したタイガにぼそりと呟く
ネーナは胸ポケットから出てこないし・・・

「ネーナ、いい加減機嫌を直してよ・・・」

「怒ってなんか無いわよ、ただイライラするだけ」

「なんでだよ〜」

俺はガクリとうなだれてタイガを見る。

満面の笑みを浮かべてこちらを見るタイガは
実に可愛らしく見えた。

「でも、アレはアレでよかつたんじゃない？」
と、ネーナがいきなりポケットから首を出していった。

「彼女、たぶん前のマスターに相当な扱いされてたんだと思う、メンテナンスも」

してなさそうだったし、だからマスターに優しくされて
あんなに甘えてるのよ」

「んなのわかるのか？」

「同じ神姫だもの、当然よ」
「そういつて胸を張るネーナ。」

なるほどね、っていつか機嫌直ったのか？
よかったよかった。

「それに私だってあんなに積極的になりたいのに・・・」

「ん？なんだって？」

「なんでもないわ」

そういつて再びポケットにダイブ。

つたく、また今回もあわただしくなるんじゃないのかなあ・・・。
そんなことを思っていたとき、いきなりタイガが

「っひ！」

と、短い悲鳴を上げて鞆にもぐった。

「え？どうしたの？」

俺は鞆を道上げて机の上に置いてからタイガに尋ねる。
すると、上半身だけソロっとだして一菅を指差した。

「あ、アレが私の前のマスター・・・私を捨てたの」

指先には一菅がいる。

「あいつが？」

俺は眉間にしわを寄せて考える

あいつは新しい神姫を自慢して勝負に挑んで

負けたら神姫のせいにしてその後はどうなってるのだ・・・？

どうなっていたっけ・・・？

次の日には新しい神姫になっていた気がする。

すると、一瞥は不意にこちらを向いてタイガと目が合った。

「あれ？トラ子じゃん」

そういつてニヤニヤしながらこちらに来た

「あれ？蒼神お前コンナ役立たず使ってるのか？ツガルに飽きたのか？」

そういいながら俺の胸ポケットにいるネーナを見る。

俺はその視線に気付き

「ふざけんな、ネーナはネーナだ、それにタイガだって役立たずじゃない」

そういつて睨みつけた。

少しだけひるんでまたニヤニヤし始める一瞥

「まあいいさ、今度の神姫はすげえんだからな」

そういつて出てきたのは、アーンヴァル型にしているが・・・
嫌な感覚がする、全体的に黒いカラーをイメージしている。

「このKAに勝てる神姫はいない、お前のネーナと咲神のシャーリ
ーだって

太刀打ちできるわけが無い、次のバトルでお前等の神姫を壊して
やる」

そういつて自分の席に戻った一瞥。

まだ鞆で震えていたタイガに俺はそつと頭を撫でてやり

「お前は役立たずじゃない、俺が保障する」

「そうよ！あんなバカ私たちが一発風穴開けてやるんだから！」

そういつてガッツポーズするネーナ。

「おにいちゃん、ネーナ・・・ありがとう！」

顔を見上げて泪混じりに笑うタイガ。

さて、何はともあれ、またあのバカの神姫を負かしてやらないとな・

・・・。

でもなんなんだ？あの黒い感覚は・・・。

<タツタツタツタツタツ>

その神姫は走る、背中のパーツを破壊され飛べない彼女は

レッグパーツのスピードを生かしてただ逃げる。

後ろから追いかけてくる黒い影から、そしてその黒い影の赤い目はその逃げる神姫のみを狙っていた。

第3話 タイガの前マスター（後書き）

ががががーん！！

読者の一人がPSPでフェレット型は望み薄っていった！

うそーん！！

で、でもまだ希望はある！・・・と思いたい（泣

何はともあれ課外授業が終了して今日から本格的な
冬休みのスタートです！！

第4話 黒い神姫

「で？いつたいナンノ冗談だ？」

俺は引きつった顔をネーナとタイガに向けた。

ネーナは俺のパジャマの胸ポケットにクースカと・・・。
タイガは俺の枕元で俺の顔の真横でクースカと・・・。

んでもって時間は午前8時・・・今日平日・・・。

「ちいこくだああああ！！！」

俺は涙目になりながら自転車をこぎまくった。

おかしい！おかしいぞ！？ちゃんとネーナもタイガも
充電ベッドに寝かせたはず！そんで充電もさせたはず！

なんで俺のポケット&枕元に！？

タイガはいつものことだけど・・・ネーナはありえねえだろ！？

「うわああああん、マジかよおおおお！！！」

俺の叫びは町中に響いた。

「スイマセン！寝坊しましたあ！！！」

俺は扉を勢いよく開けてまず謝罪、誤るのは大切なことだ。

だが、その教室は普段こういう状況ならゲラゲラ笑うところなのに
ちよっと違った、神姫を持つてる奴たちはネーナたちを

指差してヒソヒソはなしている。

(ん？なんだ？この空気・・・何かあったのか？)

そう思つて教師のお叱りを待つが

「席に座ってください、蒼神くん」

と、何かおびえた様子で俺に声をかけた。

俺は席に座り横の席のロキに聞いてみた。

「なあ、何かあったのか？なんか教室がおかしくね？」

「ああ、上の学年の奴が死んだらしい」

「はあ！？」

俺は小声で叫ぶ、死んだつてそんな・・・

だが、ロキはそれに続けてこう続けた

「でよ、犯人つーか目撃者の証言では小さな人形が先輩を撃つたつて、実弾兵器で」

「実弾つて・・・神姫か？」

「まだ確証はねえけどな、それに一首の奴が朝来たときにみんなに向かつてこういったんだ

『お前等のようなクズは、俺達のような選ばれたものについてくればいい』つてよ」

「なにそれ邪気眼発祥？」

俺は笑いをかみ殺しながらロキにいった。

ロキは真剣な表情で続けた。

「いや、俺達も最初は相手にしなかったんだけどさ、そこにデケエ穴があるだろ？」

ロキが指差した方向には確かに銃弾ぐらいの穴が開いていた。

「あれ、一菅の奴がああ黒い神姫で開けたんだよ、ハンドガンっぽかったけどよ」

「でもアレ完全に殺傷能力あるだろ！？普通神姫の武装はゲーム感覚、せいぜい

傷が出来てやっとだぜ？いや、連発したり急所を狙われたりしたら別だけだよ」

俺は明らかに動揺している、自分でもわかっていた。

こんなこと普通の神姫に出来るわけが無い。

俺の脳内はその言葉でエンドレス、だが、現に神姫らしきものが上級生の先輩を殺し、一菅は壁に銃弾のような傷を作った。

偶然にしては出来すぎていた、まるでタイミングを見計らって全ての事態を

起こしたように……。

「でもよ？あいつの性格からして、新しい神姫や強い武装を自慢したがるのはわかるけど……。」

「なんだよ？」

「それで人を殺せるのか？」

俺は最大の疑問点をロキに聞いてみた。

普通武装は本物を縮めて作るような感じだ。

結局モデルガン程度の威力しかない、近接にしるそうだが、服を着ていればちょっと刃が刺さるくらいだ、人を殺せるわけが無い。

「それは・・・」

ロキが答えようとしたとき、授業の終了チャイムが鳴った。

これで午前中の授業はおしまい、それに不測の事態らしいので今日はこれで下校らしい。

授業終了のチャイムがなり、俺とロキは屋上に向かった。

そして、誰もいない屋上に二人は座り、先ほどの議題を持ち出した。

「それで？どうなんだよ」

「さあてな、ぶつちやけ大剣あたりなら肉を裂くくらいならできろぞ」

「なら、先輩の死因は？」

「わからない、だけど目立った外傷が無いから心臓を一発だと思っ」

「なら・・・先輩に神姫はいた？」

「いや、あの人は神姫を持たない、どうしてだ？」

「一管の言葉だよ、力の無いもの、仮定して神姫を力だしたら神姫を持ってないもの」

「は自分に従え、見たいな言い回しじゃないかな？」

「いや、でもさ、それは無いと思うよ？そんなんだったらこの学校は
少人数しか神姫無所持者はいない、それだけなら・・・」

「それがもし、『まともな戦いで勝てない神姫』も、やつの力の無
いものに入ってるとしたら？」

俺の言葉にロキは眉を寄せる

「どゆこと？」

「あいつは今『力』を持っている、その力が今現在俺達二人に太刀
打ちできるかは

わからない、けどあいつはその場でロキ含め全員に喧嘩を売っ
た」

俺は人差し指をたててロキを指す。

「ああ、そうだな、少なくとも血の気の多いやつ等は殺意むき出し
だった」

「だろ？ってことは今あいつは自分の神姫の力が絶対であることを
前提に話している

そして、今日はもう生徒がない、俺がここを選んだのは校舎裏
も見えるからさ」

「はあ？どづい意味だよ」

「考えても見ようぜ？血の気の多いやつ等がさ、あのバカをこのま
ま逃がすと思うっ？」

「・・・まさか」

「っそ、きつともうすぐ始るんじゃないかな？ゲリラ戦」

そこまでいった瞬間、丁度校舎裏あたりで大声がした。

「ビンゴ、行くぞ」

俺は鞆を持ち口キとともに屋上のふちに進む。

そこにはウチのクラスの3人が一菅につかみかかっていた。

「テメエ、朝は喧嘩売ってくれたなあ」

「その面ボコボコにしてやるうか？ああ！？」

「大体蒼神たちに勝てねえやつが俺達に勝てるわけねえだろ！」

その三人は明らかに殺意をかもし出してる、だが、一菅は涼しい表情を

崩さない、むしろ楽しんでいるようにも見える。

「おいおい、俺があいつ等に叶わないって誰が決めた？おい」

そういつてつかみかかる手を振りほどく。

「なんなら試すかよお？テメエ等みたいなゴミ神姫瞬殺だぜ？」

そういつて鞆から出した黒いアーンヴァル

「KA、お前の力見せ付けな」

そういつてすでに武装していたKAが地面に着地した。

「上等じゃねえか、アイ！」

「ぶっ飛ばす、ケイ！」

「ナメンじゃねえぞ、ルイ！」

そういつて武装させた3つのマオチャオ型

「っは、猫風情が、ぶっ壊してやるよ」

「なんだとお!?!」

「マジ頭壊れてんじゃないね?」

「いいぜ!逆に壊してやる!」

三人は一気に攻撃を仕掛けた、一人は後方から多弾頭ミサイル、一人は走りながら機関銃、ラストの一人は斧で突撃。

いいコンビネーションだ、多対一にしても

あいつの神姫に勝ち目は薄い……。
そう思っていた。

「おせえな、KA!」

一管の叫びでKAはリアパーツの腕と合計4本の腕で行動を始めた。まずはガトリングでミサイルを迎撃、その間に斧の神姫に被弾させてひるませる、そして流れるように機関銃を撃ってる神姫に飛び込み小剣で右腕と左足を切り裂く。

「ケイ!」

生徒の一人が神姫の名を叫ぶ、それを無視して一管は多弾頭ミサイルを撃った神姫に向けてライフルを放った。

ライフルは神姫のコアシステムを貫き、全てのシステムが消えさせる
「アイ!嘘だろ……。マジかよ!?!」

マスターの悲痛な叫びが響く、そして、なおも攻撃の手をやめよう
としないKA

今度は斧をもった神姫に向けてガトリングを連射。

「うそ、きゃあああ!?!」

神姫の悲鳴が聞こえる、一瞥は、それをニヤニヤしながら見つめていた。

「ルイ！やめてくれ！もうやめろ！」

マスターが懇願するも一瞥はただ一言。

「ヤダ」

そういつて射撃を再開させる。

そして、装甲がほとんど無くなったとき。

「ネーナ！」

俺は自分の神姫に叫んでいた、ネーナもわかっていたらしくすでに武装している。

「了解よ、マスター！」

ネーナはライフルを構えてKAの腕に向けて撃つ

弾はKAの武器を破壊して斧の神姫と距離をとらせる。

そしてそのまま下に向けて飛び込むネーナ。

その手には小剣が握られていた。

「この・・・ばかぁ！！！」

ネーナは叫びながらKAのリアパーツを切り裂く。

「どうして！？どうしてこんなことが出来るの！？同じ神姫でしょ！！！」

そういつて剣を振り上げるネーナ。

KAは大剣でそれを受け止める。

つばぜり合いになる両者、そのとき、ネーナが異変に気付く。

(この子、神姫じゃない!? 違う何か・・・?)

そう思ったネーナは直感的にKAから飛びのいた。

そして、それと同時に俺も屋上から降りてくる。

「ネーナ! 無事か!？」

「なんとかね、だけどおかしいよ! あいつ・・・神姫じゃない・・・」

「なんだと!？」

俺はKAを見る、見た目は黒いアーンヴァルだが・・・。

「ロキ! 加勢してくれ!」

「了解な、シャーリー!」

「はいです! マスター!」

そういつてシャーリーもネーナの横に立つ、これで二対一・・・。

(状況的にはこちらが悠利・・・だが何だ? この違和感は・・・)
俺はぬぐえない不安を押し殺してネーナに指示を飛ばす

「ネーナ! 相手が神姫じゃないなら全力で撃て!」

「了解、全力で撃ち抜くわよ!」

そういつて再びライフフルに持ち替えるネーナ

「ロキ、時間稼げるか?」

「たぶん・・・どうして?」

「全力で撃ちたいからチャージさせる」
俺は額の汗をぬぐい呟く。

(チャージすれば一気にあの装甲を破壊できるだろう・・・コアの
近くを狙えば

あの神姫っばいなにかも動けなくなるはず・・・)

「ネーナ、チャージ開始」

「わかったわ、でも・・・」

「ロキが時間稼ぎしてくれる」

「任せてよ、シャーリー、危なそうになったら下がれ、でも出来る
限り・・・」

「もちこたえるわ!」

そういつて駆け出したシャーリー。

「お兄ちゃん!私もいけるよ!」

そういつて鞆から這い出てきたタイガ

「タイガ?!ダメだよ、君は・・・」

「行かせて!ネーナのために何かしてあげたい、お兄ちゃんの役に
立ちたい!」

まっすぐな瞳でこちらを見据えるタイガ、その目は
いつもの甘えん坊とは違い、はつきりとしていた。

「わかった・・・危なくなったら・・・」

「うん、危なくなったら逃げるよ!」

そういつてナツクルを装備して突っ込むタイガ。

「っは、役立たずが増えたところで何にもなんネェンだよ!」

一菅はKAに指令を下す、どうやら狙いをタイガにしてきた。

「っちい!ネーナ!チャージまでの時間は!?!」

「あと60秒!」

「持ちこたえろよ・・・タイガ!」

「うん、頑張るよ!」

そういつてナツクルで交わし交わし応戦するタイガ。

その身のこなしは一菅をイラつかせた。

(あんなゴミに何をしている!KA!)

一菅は自分のKAを睨みつける。

(あのゴミも・・・また使えないか・・・)

そう思った、彼は使えない神姫は捨てたり壊したりしている。

捨てた神姫は大体壊れて死ぬのだが・・・

(まさかあのトラ子が生きてるとはな・・・まあいいさ、また壊してやる)

ニヤリ、とほくそ笑んだ一菅は

「KA！全力で壊してやれ！」
KAに指示を出した。

KAは大剣を持ち直し振り上げる
そして、振り下ろそうとした瞬間！

「タイガ！シャーリー！下がれ！！」
俺は二人に向かって叫んだ。

二人の神姫は即座に飛びのきKA一機になる。
「ネーナ！狙い撃て！」

「もちろん！いつくわよお・・・」
そして狙いを定めたネーナは

「貫けえええええ！！！！」
叫びながら引き金を引いた。

チャージされた弾はまっすぐにネーナの狙い通り。

コアシステムの真横、胸の中心を撃ち抜いた。

「な！？」
一管は驚きと怒りを混ぜた表情を俺に向けた。

「テメエ、一度ならず二度までも・・・」

「っは、所詮はその程度だ、懲りたら喧嘩なんざ売らんじゃねえ」
俺は一睨みしてからロキと共に学校を出た

そして、イザ帰ろうとしたとき、一言は

「お前等、いい気になってんのも今のうちだぜ！いずれ後悔することになる」

その叫びは俺達には負け犬の遠吠えにしか聞こえなかった。

『今はまだ・・・いつもの負け犬の遠吠えと同様聞き流していた・・・』

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

その神姫、アルトレーネ型は黒い影から逃げていた。

「も、もういやあ・・・」

半壊してしまったその体は、ついに充電切れを起こし、とある民家の前で倒れた。

第4話 黒い神姫（後書き）

はい！とりあえずこれ呼んでる人に質問です！

PCでの武装神姫ってなんて名前ですか？

俺ちょっとやってみたいんで

よかったら教えてください！WWW

ちなみにフレット型はでますかね？

出てたら教えてくださいなWWW

第6話 追われる神姫と天才発明者

「……みんなは休日どう過ごす？」

「グース力寝てスゴす？」

「みんなと遊んでスゴす？」

「神姫たちとたわむれる？」

休日の過ごし方なんてどれが正しくてどれが間違いなんかないっしょ？

でもね……例外というものはどこかに現れる。

あさ、ネーナがいつものように早起きしてくれて新聞を取って来てくれたのだろう。

その新聞に和食の朝食。

俺は寝癖を直さず顔を洗って食卓に立つ、頭の上にタイガが乗っている。

席についた俺が、まず目にしたものは……。

「また神姫ツスカ……？」

それはお箸の隣に普通に横たわっている
半壊された神姫、アルトレーネ型の神姫だ。

「っあ、それ玄関に倒れてたの、とりあえずマスターに見てもらおうかと思って」

と、普通に朝のニュースを見るしっかり者ことネーナ。

「俺は多少の傷や故障なら直せるが……いくらなんでも半壊して
チャ無理だろ」

俺は朝食をとりながらネーナにいつてみる。
ネーナはそれを待つてましたとばかりに目を光らせ

「ええ〜？なら何でタイガは直せたの？半壊よりも酷かったじゃない」

「それはうちに直せる器具があったからだ、アルトレーネは新型だよ？そんな予備パーツは

まだ俺も持つてない」

味噌汁をすすりながら反論。

「たぶんツガルのパーツでも上手く適合しないと思うし
そういいながらアルトレーネを見る。

見たところ一番ひどいのはコアシステムの周り・・・

（何かに切りつけられてる？でもこのサイズの傷なら神姫・・・）

俺はちよつと悩んで食い終わった朝食を片付けて皿を洗う。

その間にネーナは

「直してあげようよー、ねー、マスター」

と、珍しく駄々をこねていた。

（珍しいな、ネーナが駄々こねるなんて、いつもは命令口調に近いのだが・・・）

そう思いながら皿を洗い終わる。

（でもまつ、そんなネーナも可愛いしいいか）

俺はいったん部屋に戻り服を着替える。

そして一本の電話を入れる

「あつ、俺だ、うん、ちょっと半壊したアルトレーネがいてさ、お前治せるかな？」

そして、話がついて俺はリュックを背負う

「うっし、ネーナ、タイガ、出かけるぞ」

「え？どこにどこに？お兄ちゃん」

タイガが無邪気な声で尋ねる。

俺はふふっ、と笑ってから

「アルトレーネの修復さ、幸い俺の友達には天才がいてね」

「ってことで頼むわ」

俺は半壊してしまったアルトレーネを差し出す

「あのねえ・・・私の話を聞いていたのかしら？」

腰に手を当てている眼鏡娘の名前は

ひめじま
姫島 さおり
沙織

自称天才発明者のどじつ娘。

身長は150センチと小柄で胸は無い（これを以前本人にうっかり

口にしてしまい硫酸を

かけられそうになった）

髪は黒で首の付け根辺りまで伸ばしている、それを右側で括っている
るので

右側にアホ毛が出来ているように見えるがこれは本人的には
チャーミングポイントらしい。

女の子の感性はわからないものだ……。
ちなみに彼女は高校入学と同時に仲良くなって今ではそれなりに
気の許せる女の子の一人。

(だけど自称の割には結構作ってんだよなあ……。)

実はネーナの装備の3割は沙織に作ってもらっている。
それは今でも健在だ、さすが自称だけあっても発明家だな。

だが、こういった類以外のものになるとてんでだめ。
以前に惚れ薬とか作って俺に飲ませようと必死になったあげく
それが地面にこぼれた途端に地面がどろどろに溶けてしまったという
恐ろしい事例も残っている。

つい最近ではロキに千里眼なんて薬を飲ませて
あいつ一時人格が崩壊してたしな……

いったい何を見たのやら……
「で、頼めるか？」

「まあいいけど？ほら、私天才だし」
そういつてアルトレーネを受け取り作業に入る

「コアシステムの中枢は無事だから後は周りのパーツの補強か、
30分で終わるからそこらへんで時間つぶしといて」

そういつて作業に入る沙織。

ちなみに彼女はやるときはやる女の子なのでこうして

作業に入るとホントにきつちりとした作業をする。

「さて、ネーナ、タイガ、何をする？」

「はい！探検がいいですよにいちちゃん！」

「してもいいけど終わった頃には体半分消し炭になってるかもよ？」

「え！？」

「そうよ、一度私がシャーリーと探検したらホントにヒドイ目にあつたんだから」

「何があつたの！？ネーナお姉ちゃん！」

「お姉ちゃん！？まあ、いいわ、ホントに右腕が真っ黒こげになつちやつたんだから」

「え〜！？」

驚くタイガ、確かにネーナとシャーリーが始めて沙織の家に来たとき探検をしてシャーリーは左足をネーナは右腕が真っ黒になつていた。何を触つたと聞いたら何か赤いも望のようなものを触つたらしい

（あれつてただのストーブじゃないのかな？赤いつて）

そう思っていたのが的中したあげくはネーナをこつてり叱つた。ストーブに手を突っ込むなんてのはただのアホだと。

そして、そんな思い出に浸っていると

「うにゃー！ー！ー！？おにいちゃーん！ー！ー！」

と、タイガの悲鳴と

「ちよ、ちよつときてマスター……!!」
と、ネーナまでも悲鳴を上げる

「こんどは何をしたんだよ……」

俺は悲鳴の元に歩いてその現状を確かめる。

どうやら何かを見つけて歓声を上げていたらしい

そして、彼女達が指差すその先には

「なんだこれ？ロボット？」

それは俺と同じ身長のようなロボットだ、胸の真ん中に
神姫サイズの穴が開いている……なんだこれ？

「で？これがどうしたの？」

俺はネーナたちを肩に乗せて聞いてみる

「え！？だつてこれ神姫が人間になる装置でしょ!？」

珍しくネーナが驚きの声を上げる、子供のように無邪気な声で。
「いや、んなわけねえだろ？だとしたら大発明……っあ」

俺は一つ思い出したことがあった、それは丁度2ヶ月くらい前。

俺は沙織に『神姫が人間だったらいいのになあ』と、ネーナの

ノロケ話と一緒に話していた、それを沙織は

『任せなさい！この超天才発明者こと姫島 沙織が叶えて見せよう
』!

と意気込んでいた。

（まさかマジでやったのか？でも……適当な面が一つも見当たらない……）

まさかな……そう思っていたら沙織が

「おーい、ご両人、修復完了だよ」

と、声が聞こえた、俺達は沙織の下に戻る。

「はい、記憶障害は無いけどまだ状況が把握できてないみたいよ？」
沙織の視線の先にはびくびくしているアルトレーネ型

(わあ、前のタイがじゃん、超可愛い)

と、自覚している異常性癖？が出掛かっているところで

ネーナが耳を引っ張る

「いだだだだだ！！」

「マスター？頬が赤いよ？まさか可愛いなあ、なんて思ってたんじゃないでしょうねえ？」

そっぴいながら耳を引っ張るネーナの額には
血管マーク、が浮き出していた。

「ちょ！福耳になるからやめて!?!」

「いいじゃない、ご利益あるかもよ？」

「ねえよ!?!むしろ笑われるわ!！」

「神様に失礼でしょう!！」

「ごめんさいいいいだだだ!！」

と、いつものコントを繰り広げてる間にタイガはアルトレーネの元に駆け寄り

「初めまして、タイガっていうよ、あっちの赤い神姫はネーナお姉ちゃん」

「ネーナ・・・さん？」

「うん、そんであの耳を引っ張られてるのはおにいちゃん!！」

「お兄さん？」

「うん、私のマスターなのです！」
そういつて胸を張るタイガ。

アルトレーネはびくびくしながら

「あ、あの、アレは止めなくてもいいのでしょうか……？」

「全然大丈夫、アレは日常茶飯事だから」

そういつてVサインを作るタイガ

「それよりさ、名前何？」

「名前ですか？」

アルトレーネは頭を抑えて

「すみません、名前というものは付けられてないので、識別コードならARTですが……」

「ART？なんががちがちな名前だな、お前はセシリアでいいよ
俺はようやく耳からネーナを外して

アルトレーネに向かう

「セシリア……ですか？」

一瞬ビクツとしてから聞き返す

「っそ、いいとおもっただけど気に入らないならかえる？」

俺は笑いながらアルトレーネに聞いてみる

ネーナがテクテクとアルトレーネに駆け寄り

「気をつけてね、あのマスターはネーミングセンス皆無だから
と、耳打ちするネーナ

こら、俺よりネーナのほうがネーミングセンス無いだろ。

だが、アルトレーネは首を振って

「いいえ、いいですよ、セシリアで、私気に入りました」
そういつて俺の元に駆け寄る

「それではヨロシクお願いしますね？えーっとお兄さん？」

「だからなぜ!？」

俺は頭を抱えながらうめく、なぜお兄さん!？

「マスター・・・ちよーっとお話聞かせてくれるかなあ？」

と、ネーナが背中に炎を背負って向かう

怖いですが、ネーナさん

「俺のことはマスターでもキョウでもなんでもいい、お兄さん以外なら」

俺はネーナを手で制しながらセシリアに言う

セシリアは少し悩み

「わかりましたマスター、ではなんとお呼びするのか決まるまでマスターと呼ばせていただきます」

そういつて俺の頭に飛び乗る

「それで？沙織、このきずは・・・」

「うん、神姫だった」

そういつて壊れた武装を俺に渡す

「こんなちっぽけな武装でよく持ちこたえたもんだよ」

「そうか・・・まあ助かったよ」

「いいよ、君のためならね」

「え？なんだって？」

最後のほうが聞こえなかったのだが・・・

「なんでもないわ、それより彼女、どうする？」

「あのままじゃかわいそうだし、俺が名前付けちゃったし、俺が引き取るよ」

「そか、それじゃあ頼むよ」

「ああ、・・・ああそれと、あのロボットのことなんだが・・・」

「神姫が人間になるロボットでしょ!？」

俺の言葉をさえぎり胸ポケットから上半身を飛び出させるネーナ
沙織は一瞬何のことがわからず眉をひそめるが
すぐに理解したようでそのロボットの下まで歩いていく

「そだよ、前に蒼神くんいったじゃん？神姫が人間になれたらなあって」

「まさかマジで出来たのか？」

「はは、まだ試作品さ改良を重ねたりしないといけないからまだまだ完成品よりは遠い」

そういつてにつこり笑う沙織、俺は不意にもドキリとしてしまった。

「そ、それよりさ、お前、なんでコンナに発明してんのに発表しないの？」

沙織は普段はおとなしいどじつ娘だ、研究のことは俺とロキしか知らないし彼女も俺達に口止めしている

「わたしは縛られたくないからさ、研究とかって横取りされそうだ

し」

そういつて手を広げる

「でも、これで私は満足だよ？神姫だって近いうちに買っし、私を認めてくれる人が

いればそれでいいの」

そういつてこちらに歩み寄る

「だからさ、また私を頼ってくれると嬉しいな」

頬を赤らめて恥ずかしそうに俺にそういつてくる沙織

俺は笑いながら

「お前ほどいい武器つくる職人はいないよ、また頼むぜ？」

そういつて部屋を出ようとした、そして扉に手をかけたあと

「そだ、お前さ、近いうちに三人で遊ぼうぜ、お前が神姫を手に入れたときにでもさ」

「うん、喜んで」

そういつて手を振った沙織。

「それじゃあ気をつけてね」

「お前もな、そんじゃ明日学校で」

そういつて俺は沙織の家を出た。

「さて、自宅に戻ったのはいいのだが・・・にぎやかになったなあ

」

俺は机の上で遊ぶ三人をみて呟く

どうやらセシリアは俺達にはなじんでくれたみたいだな、直してくれた

沙織にもなじんでるようだし・・・

「さて、もう寝ますか」

俺は自分のベッドに入って電気を消す。

<ゴソゴソ・・・>

「?????」

俺は枕元に何かが置かれた違和感を覚えてケータイで照らしてみる。そこには充電ベッドを俺の枕元に置くセシリアがいた

「なにやってんだ？」

俺はジト目でセシリアに聞く

「添い寝です！タイガさんにそれが一番マスターと仲良くなる秘訣とききましたので」

「おまえなあ・・・」

俺はため息を吐きながら逆側に顔をやる。

「だよなあ・・・」

俺の予想通りタイガとネーナまでも枕元に着ていた

「いいじゃない、たまにはさ」

「私おにいちゃんと寝たいー！」

「いいですか？マスター」

と、神姫×3の頼みごとに俺は盛大なため息をついて

「もう・・・好きにしてくれ」
そういつて目をつぶる。

だが、この状況が嫌い、そういうわけではない。
むしろ好きだ、にぎやかなのは大好きだ。

セシリアがみんなと仲良くなってくれる、タイガやネーナのサポートがあつてからこそ
出来たこと、彼女達はもう仲間だ。

「俺もいいマスターにならなきゃな」
思わず呟いたその言葉。

もうすぐ高校2年生、冬休み目の前のこの時機に神姫がいきなり2人
増えた。

そして、不穏な影もつごめいていた。

ただの高校生に出来るのか心配だけど・・・
巻き込まれた以上はやるだけだ・・・。

だけどそれでこいつ等を失うのだけは絶対に嫌だ。

だから、いいマスターになろう。

そんな決意をした休日になった。

後日ロキがめーるで

『お前神姫で妹プレイしてるってマジか！？変態か！？シスコンか
！？』

と着たので俺は次の日ロキの頭に
思いつきりキックをかましましたとさ。

第6話 追われる神姫と天才発明者（後書き）

さて・・・明日から実家にかえるぜい！！

さてさてさて・・・なんか重い話しになりつつあるので心配だ W

W W

最初はギャグとかオンリーでいこうかなあ？と思ったんだけどね。

まあ適役作ったらハードな内容と指摘されました W W W W

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6472z/>

武装神姫～神姫が奏でる音～

2011年12月29日13時49分発行